

サマリートーク

祐成 保志

札幌学院大学の祐成と申します。

今日午前から3人の講師の先生方にご講演をたまわりました。ご多忙のなか、本学までおいでいただきましてまことにありがとうございます。明日、半日さらに補足講演を行っていただいたあと、全体のディスカッションという構成になっております。私の方からは、本日もかかった先生方のお話のなかで示していただきました論点のなかで印象に残った点、および明日の補足講演でさらにお話をお聞きしたい点について、いくつかお話をさせていただきますきたいと思います。

このシンポジウムは、社会情報学部の主催で年一回行われています。完成途上の学問としての社会情報学の取り組むべき課題を論じる場となることを目指してまいりました。

これまで、災害と情報、情報のセキュリティ、社会調査のデータ・アーカイブ、北海道のローカル・メディア、情報教育、多メディア時代のコミュニケーション、といった、比較的コンパクトなテーマで開催されてきました。今回のテーマは、これまでの流れからすると、やや漠然とした印象をお持ちになる方もいらっしゃるかもしれません。少し、企画の意図をお話しさせていただきますたく存じます。

私どもの学部は「社会情報学」を名乗っています。すでに15年目になりますが、ここで改めて、「社会」という概念にこだわることも意味があるのではないかと考えました。私自身は社会学を専攻しておりますけれども、社会(society)という概念のコアには、「多様

なもの」の連帯」という含意があると考えています。

この、社会的連帯の困難と可能性こそが、19世紀末から20世紀初頭という危機と解体の時代に直面して登場した社会学・社会調査・社会事業そして社会政策を駆動する問いではなかったかと思えます。そこでは理論と実践、学問と政策が不可分のものとして追求されていました。もちろん、これらの関係は、価値判断の問題をはじめとして、なかなか一筋縄でいかない難しいものでありますけれども、少なくとも、「社会」という言葉には、人と人の望ましい関係とは何かという問い、またいかにしてそれを構想するか、という問いが込められていたと言えるのではないかと思います。

このような意味での「社会」へのこだわりは、情報あるいは情報技術への視点を軽視することを意味しません。むしろ、連帯を支える技術的な条件として、確かな情報技術・コミュニケーション技術が不可欠になるからです。社会について深く考察するなかで、情報という概念の意義も明確になってくると思うのです。言い方を変えますと、社会情報学の一つの可能性として、情報技術を、それらを使う人間やそれらが置かれる状況に着目する社会的な視野でとらえる点、そして、社会構想を思想的展望に加えて技術的な基礎づけとともに示す点を挙げるができるのではないかと考えます。

マクロな領域でのグローバル化、その逆にミクロな領域での医療技術の進展、

それらのベースにある情報技術の革新といった変化のなかで、社会のなかにかつてとは異なった質の関係が生じているとともに、一方で、ますます社会が断片化しているようにも見えます。だからこそ、「様々な属性をもった主体が共生・連帯する」という意味での「社会的なもの」が重要度を増しているように思えます。

いままで申したことをまとめますと、今回のシンポジウムのテーマは、企画させていただいた立場から申し上げますと、二つの焦点があると考えています。一つは、社会情報学における政策的思考の重要性をいま一度省みるということ、もう一つは、身体との関わりのなかで、具体的にモノを作っていく、そしてモノを使用するという現実的な側面を重視するという点です。

その意味で、先生方には、たいへん示唆に富んだお話をいただいたと考えております。重ねて感謝申し上げる次第です。

まず、安村先生のご講演については、具体例で挙げていただいたモノやアイデアがいろいろもたいへん楽しくて、実物を見たいという思いに駆られました。

利用者とのインタラクション、相互作用。それは、人工物を、市場に出た時点で完成した存在として捉えるのではなく、終わりのない人とモノとの交渉、ネゴシエーションのプロセスとして捉えるということではないかと考えました。それは、けっして一方的な「制御」ではありえないものです。デザインがユーザーの潜在能力を引き出す。逆に、ユーザーの「創発的使用」がデザイナーも意図しなかったモノの力を引き出す。そうだとしますと、デザインは本来的にオープンエンドな性質をもっているのだと思います。

この、終わりのないプロセスという考え方は、ユニバーサルであることを実現する場合に、たいへん重要になってくると思うのです。

つまり、ある完成の時点进行を想定して、「この製品はユニバーサル仕様でつくりました」と言ってしまうことには落とし穴がある。ユニバーサルであることを目指していくような、絶えざる実践なり相互作用の方が重要であって、ある人工物のある時点での材質であるとか形態が重要なのではない、ということではないかと思うのです。製品としての完成に向かうよりも、人とモノの交渉のあり方を把握し、適切にコーディネートするような営みこそが、自覚的なデザインと言えるのではないのでしょうか。

私から先生にお聞きしたいのは、インタラクション・デザインの実際についてです。「ポストプロジェクトX」という言葉がたいへん印象に残ったのですが、右肩上がりを前提としない、新しいデザインのあり方だと思います。では、具体的にどうやってデザインしていくのか、例えば、ユーザーの使用している場面を観察する方法、また、それをどのようにデザインに生かしていくのか、という点について補足していただければと思います。

次に、三重野先生には、社会構想を行う場合の土台といいますか、足腰の部分としての指標の面と、それを先導する理念の両面にわたってご講演いただきました。

一つの学問分野として社会情報学が論じられるようになったのは1980年代であると認識しておりますが、それは、政策に関わる情報の組織化が急速に進んだことと関連があったと思います。地域情報化といったことが盛んに言われ、いろいろな構想が打ち出されました。その前段階として、1970年代に、先生からお話いただいたように、盛んに社会指標が整備された。それは、どの県の住宅の面積が広いのか、どの県が暮らしやすいのか、といった「豊かさの指標」へと政治的に矮小化されたりもするわけですが、一方で、1990年代のゴールドプランや、それを前提とする

介護保険の導入・運用や昨今の地域福祉計画の策定などに見られるように、地域社会計画というのはそれなりに実質化されてきたのではないかと思います。

一方で、社会科学がそれに対してどのようなスタンスを取るべきか、という点が問題となります。経済学と経済政策が密接な関係をもっているように、基本的には、社会学もまた社会政策であるとか社会計画との関連が問われるのだと思います。実際、全国総合開発のような国土計画については、古くは福武直をはじめとする数多くの社会学者が検証を試み、構想と現実の落差を見だしていきました。本日お話いただきましたように、三重野先生もその評価指標の開発に関わってこられました。

政策は文字通り道路やダムといった人工物を生み出していくわけですが、もちろん政策や制度それ自体も人工物であります。そのデザインは、政策プログラムの効果についての評価を通じたフィードバックを組み込んだものでなければ現実と乖離していくことになります。安村先生から、ユーザー、生活者主体のデザインという視点を提起していただきました。社会制度という人工物をデザインする政策という実践もまた、インタラクティブなものにならなければいけないのではないかと思います。その際に、評価情報をどのように収集するか、その指標をどのように設定するかが、やはり決定的に重要になるのでしょう。

先生がご紹介くださったように、各省庁自治体内部でいろいろと模索されています。それらはどちらかというと、上から網をかけるような、マクロな指標体系だったと思いますが、一方で、評価情報を複線化というか、複数化していくことも必要ではないか。単純な言い方をしますと、下からの社会指標というのも、重要ではないかと思います。その場合の課題とは何か。つまり、社会構想をインタラクティブなものにしていくにはどうしたら

いいのか。安村先生もご質問されましたように、三重野先生は日本全国をカバーする構想について論じられましたが、例えば、小さな範囲のまちづくりの評価などは、市民自らが参加していくという可能性が一つあるのではないかと思います。

そういう可能性を展開していくときに、社会（科）学者はどのような役割を果たしているのだろうか、という点について、お話いただければと思います。

原田先生が示してくださったのは、人がつくったあらゆるモノを「人工物」として捉えるという視点でした。「使いやすい」ということが誰にとってどういう意味で「善」なのか。一見すると素朴なようで、非常に示唆的な、批判力に富んだお話をいただいたように思います。デザインする側から見て良かれと思ってつくったもの、あるいは、供給する側の都合でつくられたものが、実はユーザにとって有害であるような場合がある。お話をお聞きしていると、たとえば、地上波テレビ放送のデジタル化が実施されるとどうなるか、私も調査に少し関わっておりますが、想像するだけでも恐ろしいわけです。

二つおうかがいしたいことがございます。一つは、高齢化の特性として挙げていただいたものは、けっこう若者のなかでもあてはまるのではないか、という点です。若者と高齢者を比較すると若者に軍配が上がるのでしょうか。若者のなかで比較すると、そのなかでも結構多様性があるのではないかと思います。あるいは、ジェンダーによる差もあるのだらうと思います。そういった広がり期待されるテーマだと思いました。

いま一つは、カタカナの「モノ」（人工物、アーティファクト）という概念の有効性は、無形物にも適用できるところにあると思います。具体例では目に見える形を持ったモノを扱っていたと思うのですが、無形物、例えば

社会制度の認知工学的な検討、人間がつくった制度や仕組みのユーザビリティテストはいかにして可能か、という点です。

三重野先生がご紹介くださったように、役所も新しい制度を作るために努力しているようですけれども、それを完成品、決定版としてつくっていった場合に、ある種の善意で作った制度がけっこう有害になる可能性もはらんでいるのではないかと。特に、誰にとってのよい制度なのか、という点に関わってくると思います。だからこそ、インタラクション、相互性が重要になってくるのではないかと考えました。

ユニバーサルな社会とそのデザイン、という、非常に大きなテーマについてお話させていただいたわけですが、[社会]とだけ言ってしまうと散漫な議論になってしまうかもしれません。一つは、地域社会、コミュニティをいかにつくっていくのかという問題も大事になるとおもいます。また、原田先生が『〈家の中〉を認知科学する』（新曜社）で問題提起され、安村先生が「家展」を企画されましたように、「家」というのも、たいへん重要な現場だと思います。もう一つ、身近な、しかし、切実な問題を挙げさせていただきたいと思います。それは、ユニバーサルな大学をいかにデザインするか、という問題です。

大学がこれまで担ってきたのは、学生を上の方に引っ張り上げる役割でした。試験を行って、選抜して、学力を中心とする力、強さの証しとしての学位を発行する。もちろん、そうした機能は社会にとって一定の意味のあるものだと思うのですが、かつてのようなりアリティはなくなっている。また、大学という場においては、原田先生が指摘された「情報の非対称性」というのは、長い間あまり問題化されることがなかった。

「ユニバーサル・アクセス時代の大学」というようなことが言われます。この場合のユニ

バーサルという概念は、「大学に誰でも入れる」という状況を、なんらかのポジティブな意味を込めて表現する言葉なのだと思います。もっとジャーナリスティックな言い方をすれば、「大学全入」などと言われる状況を指しているわけですが、これを「危機の到来」ととらえる大学関係者は多いはずで

それは、高齢化であるとか、少子化といった人口構造上の変化を、即座に社会存続の危機と捉える視線と、どこかで通じ合っているのだと思います。しかし、冷静に考えてみれば、危機というのは、環境と社会制度、システムの間で生じるものです。環境が変わるなら制度を再設計すればよい。身も蓋もない言い方をすれば、制度が硬直的だから、環境の変化が危機として捉えられてしまう、と言えなくもないと思います。

少子化をめぐっては、『子どもが減って何が悪いか!』（ちくま新書）という本が話題になりました。著者の赤川さんは、都市化した社会ではほぼ必然的に子どもは減る。だから、少子化の趨勢をくい止めたり反転させたりする政策を考えるより先に、少子化の進行を織り込んだ制度を設計せよ、と主張されている。同じように、「大学全入で何が悪いか!」と言ってしまうのもいいのかもしれませんが、そのように言うことには、私自身やはり躊躇があります。そう言い切るためには、それなりの制度的な条件を整えないといけないことになるわけです。上から引っ張り上げる役割にとどまらず、下から支えるような役割を、大学はかつてなく求められているのだと思います。しかし、その準備は十分とは言えません。

それでもまだ大学には、いろいろな実験を行う余地が残されていると思います。一例として、私どもの大学でも取り組んでおります、障害のある学生に対する、学生を主体とする支援といった試みもごぞいます。ユニバーサルな社会をデザインするための実験場とし

て、大学が貢献できるなら、たいへん喜ばしいことだと思います。

まとめますと、ユニバーサルな社会の構築に対して、大学はどんな貢献が可能か。個々の研究者がその研究を通じて貢献するという

ことに加えて、大学という場が、どういう役割を果たせるのか、そういった点について、先生方のご意見をおうかがいしたいと思います。